

---

# 永井さん所の四姉弟

荒城 十晴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永井さん所の四姉弟

### 【Nコード】

N6115X

### 【作者名】

荒城 十晴

### 【あらすじ】

田舎の旅館の娘である私こと永井 夜月の日常を紹介します。

イケメン双子とかわいい妹、幼馴染たちは、居合いの達人、女黒魔術師、バカップルなくのいち、元ヤンな料理人等々、え、まだ追加されるようです。 私は普通なのに、

「お前のどこが普通だ!!!」 「」 「」 そんな私の日常ですが良かったら見て下さい。

## 自己紹介は大事です。いち（前書き）

はじめまして、荒城 十晴です。この作品が私にとって初めてになります。できるなら苦情は言わないで欲しいです。楽しんでいただけるなら嬉しいです。

## 自己紹介は大事です。いち

さて皆様方こんにちは、私は永井 夜月ながいよつきと申します。

性別は女。年は16歳と、まだ女性としては尻こわの青い小童こどもです。桜散る青空、とは言い難いですが、高校に入学しました。(入学してから2カ月経っている)

今はと言いますと下校しています。

私の住んでいる所は田舎です。どれくらいかと言えば、「ジャコ」から車で1時間半位の所の山です。

私は、山の宿屋の娘です。あと、双子の弟達と一人の妹がいます。

「お父さ〜ん。ただいま〜。今帰ったよ〜。」と裏口から我が父に声を掛ける。

すると、エントランスにあるカウンターから、「おお、お帰りなさい。」  
と、返ってくる。

部屋に行き、学生服を脱ぐ。

そして手伝いをするために作業着に着替える。

髪をゴムで縛っているとドアをノックする音が聞こえる。

「姉さん、ちよつといい?。」

入ってきたのは、

長男 永井 彰ながい ちかひ15歳。姉である私ですら、  
イイ男で認めている。

まあ要するにイケメンてやつですよ。お洒落な眼鏡がトレードマークな双子の一人。

「あれ、生徒会はどしたの？」

このセリフから分かるように中学の生徒会長やってます。

人望あり、成績超優秀、おまけにイケメンだから、モツテモテ。

幼馴染その3は腹抱えてゲラゲラ笑いながら「どこの乙女ゲーキャラよっアハハハハ」と、このような反応を示しました。確かに私も思う時がある。

「今日は無いから。」

「相方は？」

「聡はたぶん部活だとおもっ。」

「そう、で、何の用かな。」

「そう兄が呼んでくれないか頼んで来たから。」

「わかった。すぐに行く。」

裏口まで行ってサンダル履いて外に出る。お隣に行くには4分位かかる。だって田舎だもん。

お隣は剣道場をやっている。

剣道と言って

も居合い抜きとかそういうことやってます。

「やほー、何用かな草司郎。」

「おう、夜月。ねーちゃんから今朝荷物届いたんだけど開けてみたら新鮮な魚介類だったんだよ。いるか？」

「おー、佐枝子さん太っ腹だね。でもどうやってこんな豪華なもの贈ったん。佐枝子さん1年前に大学行くために一人暮らし始めたばかりじゃなかったっけ？」

「向こうでモデルの彼氏が出来たんだと。その彼氏からだよ。」

おおつと、読者様に紹介し忘れるとこだった。彼は幼馴染その1

鬼灯 ほおずき 草司郎 そうじろう

昔は、かわいい子供

だったんだよ。守りたい位かわいかったんだよ。

今は、イケメンですよ。かっこいい系です。今着ているのは、練習中だったんだらう練習着です。

頭の天辺てっぺんのちよつと跳ねたアホ毛がチャームポイント。歳も高校も同じだよ。

そんでもって話に出てきたのは草司郎のお姉さん。鬼灯 ほおずき 佐枝子 さえこ 3歳年上の大学生です。

ちなみに鬼灯家の人は彼の母である秋江さんを除いて皆植物の名前を入れるそうです。

もつと言えば、父である富芝ふしさん、佐枝子さんもアホ毛がある。

さて、話を戻しましょう。

「その彼氏さんてさ、なんか人気の人なの？」

鯛やら伊勢エビやら他にも高級な魚介類が入っているので聞いてみる。

「そうらしいぞ。見たときびっくりしたよ。」

「あつ、そういえば彰から聞いたんだけど、……もしかしてこれ？」

「ああ、15箱位トラックに積まれて送られ来たんだ。貰ってくれないか？」

「もちー!!」

旅館の料理に使える高級食材ばかりだし有り難いぜ!

「ありがとうね。そう君。」

「やっぱり返せ。」

「わー！わー！嘘嘘、ウソだから」

草司郎はそう君と呼ばれることを嫌がる。そう君は昔の呼び名です。

「じゃあね。かっこいいよ、草司郎。」と言えば、ムスツとするけどあれは照れてる時にやる表情ですよ。さて、家に帰ろうかね。

自己紹介は大事です。いち（後書き）

どうでしょうか？ 次は双子のもう一人の方と妹、そして女  
黒魔術師が出てきますよ。



自己紹介は大事です に(前書き)

黒魔術師は次話に出てきますよ。

## 自己紹介は大事です に

そんなこんなで13箱ばかり貰いました。どうやって運んだかと言うと箱の上に箱を乗せると言う方法です。

いやあ、これが高級魚介の重み、てやつですか！

「何やってんの姉ちゃん。」

と声を掛けてきたのは我が双子の弟の一人、永井 聡ながい さとる「あれ、聡、部活どうしたの？」

「終わったんだよ。姉ちゃんこそその荷物どうしたんだよ。うわ、ずいぶん高く積んだな。」

聡のこの反応は正しい。事実、夜月は13箱全てひとつの箱の上に積んでいるのだ。

ひとまずおいといて紹介紹介。

イケメン双子の相方。彰がインテリ系なら、聡は爽やか体育会系のイケメンである。人望あり、運動神経超凄じ、それでもってイケメンだからこれまたモツテモチ。歳は…彰と同じ。妹から奴らは学園の2大王子と呼ばれていることをきかされた。

との反応。

私はそんな笑う事か？と思ったが、

そっぴやバレンタインの時二人合わせてチヨコの山、出来てたな…。あれには笑うしかなかった。

そんでもって二人ともきちんとチヨコ返してたっけ。

「あ、聡これ運ぶの手伝って。」

聡は嫌そうな顔をしたが手伝ってくれた。優しい子です。

そこで、聡とたわいない話をしながら家に帰る。

「ふいー。疲れた」

「あはは、お疲れ様。3箱貰つとくね。」

「あ、お姉ちゃんどさと兄お帰りなさい。」

と出迎えてくれたのは、妹の永井ながい彩乃あやの

14歳美少女である。しかも性格は清楚なもんだから中学生男子のハートを鷲掴みにしています。ちなみに私は胃

袋を掴む事が出来ます。物理的に。別名「ストマック・クロウ」

ラブレターを抱えて帰ってきたこともある。彩乃はご丁寧にもひとつひとつラブレターの返事を書いていたの見たときは思わずキュンとしたよ。

私はラブレターのラの字すらないよ。フッ。悪態をつきかけたが持ち直して、「彩乃、ちょっとお姉ちゃんこれ渡してくるわ。」

「その箱なんなの。」

「あー、聡に聞いといて。」

「丸投げすんなよ。姉ちゃん。」  
「それじゃあ、行

つてくるわ。」  
「うん、いってらっしゃい。」

まず行くのは、幼馴染その2、黒川くろがわ理恵りえ

名は体を表すとはよくいったものだとおもつ。

あ、歳と高校は私と同じ。

美少女と言つか美人さんだね。

美人なんだけど性格は魔女なんだよね。以前、草司郎に濃紺色の液体を飲ませただけけどその日一日中凄いいモチまくっていた。ただし、男にだけど、ちょっと引いたけどね。別に同性

愛を否定するわけじゃないけど登校してる時にいきなり6人位の男子から、「俺をあなたの奴隷して下さい。」 「僕と一緒に死んで下さい。」

「俺、お前のこと好きなんだ…。」

#### 一部抜粋

あれには引いた。だって公衆の面前で惜しげもなく愛の告白していたから。

放課後になってもみくちやにされた草司郎は端から見て可哀想な位ボロボロだった。

肉体的にも精神的にもボロボロだったんだろうね。あの子げっそりしながら涙流していたから……。

それみて理恵は笑っていたから怖かった。ほかにも私はカエル、ヘビ、ナメクジからやたら好かれたり、幼馴染その3は 芸術的なほど不幸に見舞われたり、どれくらい不幸で言うと 1、朝から猪にしつこく追い回された。 2、行く所全て何かしら倒れてくる。

電柱が倒れてきたのにはびっくりした。 3、ピタゴラスイチミたいな不幸にあう。体育の時、カラスがあまどいに激突してあまどいが壊れ、中にあつた野球ボールが幼馴染その3に向かって飛び出した。

魔女なんかじゃないあいつは悪魔を使役してる黒魔術師だ！ と皆一様にこの反応をする。

そんなもんだから友達少ないんだよね。

私と草司郎と幼馴染その3は、まあ幼馴染と言うか腐れ縁と言った方がしっくりくる。

分かりにくいツンデレみたいなものだね。

さて、そんな黒魔術師の家の前に来たけど……。

「嫌だ！俺はまだ、死にたくないっつー！！」

ん？

死にたくない？

ぶわっ！

冷や汗だらだら。

まっまさか！！

理恵は確かに性悪で私ら生け贄にされそうになったけど人を殺そうとする子じゃないよ。前にうっかり期待の新作の薬を割って命の危険を感じたけど！！

迷い迷って7分間。

玄関のドアおもいっきり開けた。

## 自己紹介は大事です に（後書き）

理恵にはモデルになったキャラがいますよ。主に黒魔術の部分に、

自己紹介は大事です さん(前書き)

はい、荒城です。いや、見たら読んで下さっている読者がいたことにちょっと、ぐふふ、笑いが出ます。短いですが読んで下さい

## 自己紹介は大事です さん

「理恵！人殺しはダメよ！！」

「バアン！」と理恵の部屋のドアを開ける。

理恵の部屋には何故か黒山羊の頭を中心とした魔法陣を書いている。しかもよく見たら逆五亡星になっている！ 読者にマニチ、マニチとはマニアックな知識の略だよ。 逆五亡星とは、読んで字の如く五亡星を書いて逆さまにしたやつでよく悪魔信仰している人達が好んで悪魔を呼び出すために使うそうです。

理恵はフード付きの黒いコートを着ていて、何故か子供を介抱していた。

「り、理恵、あああんたその子供どうしたの！？」

子供はぐったりして顔色が悪くなっていた。

「まっまさかその子を生け贄にするつもり！」

理恵ははあ、ため息をついて、  
「……………うるさい。  
静にして」

「あ、はい」

素直に従っておく。 理恵を見て気づいた事がある。

「理恵、その小指どうしたの？」

理恵の右手の小指から血が出ていて滴り落ちていた。

「ああ、これはこの子が噛みついたから」

まあ、とやかくありまして、20分後、 「で、話を要約すると外国の親戚の子で仕事の都合上、この家に来たと…………、そんでもって



その子がわがまま言ってキレた理恵がお仕置きしてそんな時抵抗されて指噛まれたと…」

「……うん、そんなと…」

「はあ、あんたも年下相手にキレてんじゃないわよ」

「反省しているよ?」

「なんで疑問系なのよ!まあ、それは置いといて草から魚介類貰ったから届けに来たのよ」

「…うれしい…ありがとうね」  
「どうしよう…」

感謝の言葉が理恵から聞いたら薄っぺらく感じてしまう。

私は次行くね」 「ちよつと待って、」

「ん、何?」

「…せつかく来たんだからお茶位出すよ」

「お、ありがたいね」

私は後に思い知る。これが理恵のおまじないだった事を、私に薬を飲ませるためについた嘘だと言つことに…

自己紹介は大事です さん（後書き）

理恵にはモデルになったキャラクターがいるんですよ。私の中でいつかは出して見たい、という作者の願いを具現化したキャラです。

ちなみにモデルは、ガストさんのゲーム、マナ ミア2 のク  
エさんです

自己紹介は大事です よん（前書き）

よくよく危ないネタ使うあたし。そんな荒城である

## 自己紹介は大事です よん

なんか理恵の家出てから体の調子がいいな…。  
心なしか持っている箱が軽いし…。

そんな事を考えながら幼なじみその3の家に着いた。

「真白く開けて〜」

「ハイハイ、今開けるよー」

ガチャンと扉が開き、そして閉まった。

「え、な、なんで閉めんの!?!」

もう一度扉が開き、そして真白が尋ねる。

「ねえ…鏡見た?」

「家でる前に見ただけど?」

「はつきり言うけど、世紀末みたいなことになってるよ…!」

「と言うと?」

「体がケンシ ウミたいになってる。体から溢れる闘気を纏ってる…!」

「鏡、貸して…!」



「なんで希望になってんのよ!？」

「だって、明日までに切れないと学校に行った時、私の命が危なそうだし……」

「だったらしなきゃいいじゃない!」

「……薬と言つのはいろんな物の犠牲のうえであるものなんだよ?」

「あんたがそれ言つとムカつくんだけど。しかもなんで疑問符付いてんのよ!」

「……………、テへ」

「ご・ま・か・す・な!!あんたのせいで私が被害を被ってるのよ!」

「……いいじゃん、別に減るもんじゃないし……」

「……さすがに夜月をあんたの家に送り込もうか?」

「じゃあ、代わりに被験た、違った、薬品実験に付き合っで欲しい……」

「夜月……。いま理恵、家にいるよ!」

「そう……さて、覚悟しなさいよ?理恵。臍物ぶちまけてやるか「実は今、解毒剤を作ってるから待っててね……」

忘れてたけど紹介。

幼なじみその3、桜二幕<sup>オウゴン</sup> 真白<sup>ましろ</sup>珍しい苗字だけど、でかい家だし、絶滅したと思われた忍の家らしいし、なんか納得しちゃうんだよね。なんか、花札から取られたらしい苗字で、他に三家あるらしい。例えば、松に鶴、月にすすきてな具合にだね。去年から彼氏が出来たけどその彼氏が小学6年生だから、リアル、リコー、ーとランセルだ。

身長171の小学6年、そして何より特筆すべきは、ベタアマ、ドロアマ、なバカップルぶり！

例えるならふじおとかきえ、ミッチーとヨシリン、アディとチエックト…、最後のは作者の趣味か…。

それくらいあまーい。ベリースウィートなんだよ。まわりが砂糖菓子のような空気になり、砂吐けそうになる。

まあ、色々あったからねえ。それはおいおい話すとして、

「真白く、私今日は帰るわ」

「まあ、仕方ないと思うよ…その体だし」

「從慈に渡しといてくれる？」

「はいはい、わかったよう」

私は巨体を揺らしながら帰った。



自己紹介は大事です　ご（前書き）

元ヤン料理人とエロ教師登場です！

## 自己紹介は大事ですご

次の日、学校にて、

「…やっと元に戻った…」

「お疲れ様…」

「…いい実験結果だったよ」

ホクホク顔で言う理恵はほっといて、ああ、しんどかった。

家族からは警戒態勢を取られるわ、お客様からは怯えられるわ、踏んだり蹴ったりだった。

「何暗くなってるんだ？」

「…おはようさん、從慈」

はいはい、ハイハイハイ、これまたイケメンな男、彼の名前は木賊とくさ

從慈

少しキツメの美人さんです。金髪が眩しいねえ。今でこそ落ち着いてるけど、昔は荒れてたからね。なんか不良だったころの通り名が拳帝と言うなんとも恥ずかしい通り名で通っていたそうだ。中2の時、引越して来た時はかなりつばっていたなあ。

その時は私が暴れん坊だった從慈を殴り倒して落ち着かせた。

まあ、粋がっているじゃじゃ馬には少しばかりキツイお灸を据えてやっただけですよ。

いまは、地元の喫茶店で料理人兼パティシエをやっている。

「いや昨日、私が箱を届けに行ったでしょ」

「ああ、彼氏と一緒にベタベタしながら置いて行ったよな…」

「実はかくかくしかじか…」

なんて便利な魔法の言葉何だろう…かくかくしかじか…

「そりゃ、ご苦労様だな…」

「おはよう、ん、何話してんだ？」

「理恵関係よ…」

「ああ…」

「…なんでみんな、私を非難する目でみるの？」

ガラツ、「ヤッホー、エロハー、皆お久しぶり〜元気にしてた〜」

「…えつ、慶喜先生、帰って来れたんですか！！」「…」  
思わずハモる。

慶喜 よしのぶ 舞華 まいが 28歳 独身 職業 国語教師

趣味 エロの追求

「慶喜先生確か3ヶ月前に、昔、手を出した王族に追われてたんじや…」

ちなみに行方を眩ませた1ヶ月後に学校に連絡していた。

その時の肉声が録音されていた。

ICレコーダー「ヤッホー、ごめんねみんな。私今追われててさ〜、5年前に手を出した子が王族の第一王子でさ、そいつが私を捕まえに来てんのよ。王子とエッチしたのが悪かったわね〜、一夜限りっ

て言ったのに……。多分私の抹殺が目的だろうから、遅くなりそうだけど、一学期には戻って来るから」  
バラバラララ……。ヘリの音。

「~~~~~!!」

知らない言語。

バシユツ!

なんかを打った音。

「ヤバツ、逆探知された!それじゃあ、切るね」 プチツ ツーツ  
|…

以上ICレコーダーの録音記録より。

「どうやって帰って来たんですか!」

「まあ、色々とね。ちゃんと撒いたわ」

「危ないですよ!!こんな所にいたら!」

「何言ってるのよ。生徒の事考えるのが教師でしょ?」  
ジーン……

普段はエロエロで、ロングスカート履いている時に、中は履いてません とのたまっている不純教師なのに……。持ち物検査の時、バックの中から大人のオモチャが出て来て、他の先生方から叱られた不純教師なのに、こういう所が憎めないんですよ。  
そっぴやさつきから、校庭が騒がしいような……。

窓を見してみる……。。

「せんせえ〜！逃げて下さい！！」

校庭にリムジンが停めてあり、その周りには、SPみたいなのがずらりと並んでいて、真っ赤な絨毯が広げられていたみたいだ。

なぜ、みたいだというと、私が見た時には、絨毯が巻き取られ仕舞われていたからだ。

「嘘…、なんで？ダミーの情報で完璧だった筈なのに！」

「早く逃げて下さい！！」

ガラッ

「やっと見つけましたよ……」

「ツツ！！……」

「……みんな、イケる？」

「カッターあるし大丈夫だよ！！」

「……試してみたい薬持って来てるし……」

「一応、竹刀は持ってるぜ！！」

「昔の血が騒ぐぜえ！！」

その男が先生に近づいく……。

そして懐から何か出す。

それは……、ん、指輪？

「えっ？」

「あれ？」

「…超展開…」

「ああ…そうだな…」

「なんでだ？」

私達が驚いている時、男は爆弾発言した。

「一国の王として、あなたと結婚を前提に付き合いたいです！」

「ハアーーーー！！？」

まさに超展開！

## 物語を始めましょう(前書き)

事前に言います。ヤンデレなんて書いたことない!と。

そんなワケで作者の乏しい表現書いたヤンデレどうぞ

## 物語を始めましょう

「へー！あつ？えーと。んー？あああ！！ハワイの家出少年！」

「あれ…相手のこと知らないんですか？」

「拉致された時にSPみたいのに説明されただけだから」

ああ…そういう…

「そうか…あの時の事なんていい思い出にしといていつか忘れときやよかつたのに…」

「ちなみに何したんですか？」

「え？ナニって言ったら、んー、キーワードで言うと、初物食い、ホテルのベランダ、磨<sup>す</sup>り硝子、酒とか」

「他のは置いといてお酒は何に使ったんですか…」

「お酒って、直接腸内に摂取させると酔いが回りやすいんだよ」

教室内にいるほとんど聞かない方がいいと判断した。

若干1名除く。

(ちっ、同人誌のネタ…、仕入れるチャンスだったのに…)

「ん、理恵何舌打ちしてんの？」

「…うっん、なんでもない…」

「まあ、口に飲ませたのはドクターペッパーだから。あん時は未成年



年だったからね」

慶喜先生、貴方、未成年になにしてんですか!!

「どうでしょうか？返事は考えて頂けますか？」

求婚王子が動いた。

「アハハ、それじゃあ答えは今言うわね。嫌よ。断らせて頂きます」

前半はおどけて、でも後半は極めて真面目に言った。

「何ですか!？」

「貴方は結婚を前提にと言いましたね？貴方は王だ。ならば私は王妃になる訳ですよね？」

「はい、わが国の妃おかけとしてわたしと暮らしていただきたくたいのです！」

「なら、ごめんなさい…。貴方の想いには答えられない…。私は教職に就いてからこの職業に誇りを持つてるの!だからこそ…。この子達が私の宝よ!!私は宝をむざむざ捨てるような女じゃないわ!!」

じゅん。じゅん。じゅん。

慶喜先生あんたかけーです…!!

不純教師なクセしてこういう所があるから校長もクビにしないんですよ。

求婚王子が下向いて震えている。きつと感動したんだろうな…

「あなたの考えている事はたしかに素晴らしい…。けど、俺はどうなるんですか？あの時、貴方に出会って俺は王になるため必死に学んだ…！！貴方を妻にするためにいっぱい勉強した！貴方に会いたくて世界中探し回った！！なのに貴方は、俺を拒絶した！！」

「…押し付けがましい愛は見苦しいわよ。ディーヴァドット・クレイン・イルフ・オルバーディング王子…。いや、王ね…今は…」  
「っ！！…俺の名前、覚えてくれたんですね…！！」

「あたぼうよ。私は寝た女男の名前はほとんど覚えてるわよ」

慶喜先生、あなた、某世界征服を企む悪の秘密結社・唐辛子団に出てるクマのマッドサイエンティストですか…

「先生ごんだけ寝てるんだろう？」

「…百人切りに千円…」

「お、じゃあ俺は百人以下にバイト先のケーキ15品分奢りを賭けるぜ」

賭けんなよ。理恵と従慈…

「…何賭けてんだ…お前ら…」

草次郎、もうつつこまなくていいよ…

つか女も許容範囲内何ですな…

ああ、せっかく名前呼んでもらって目を輝いていた求婚王子が今の発言聞いて目が獲物を狩る獣になってますよ。

「…もういい、求婚なんてまどろっこしいのはやめだ。身体に教え

込んでやるよどれだけ好きかって…、俺以外見なくてもいいようにしてやるよ」

ああ、求婚王子がヤンデレルートに突入した。

「へえ、楽しませられるの?」

ああ、こっちはこっちで慶喜先生、サキュバスモードになった。その後2人が話をつけると言うことで教室を出て行ったその3時間後……………

ガラッ「ただいま」

「お早いお帰りで」  
机から目を上げて見ると…………

「何したんですか慶喜先生!?!」

求婚王子の目が虚ろになってる!!  
なんていうか何か『堕ちた』と言う表現がよく似合う感じになっている。

ジャラッ

ん……………慶喜先生の手鎖がある。

鎖の先を目で追うと、……求婚王子の首に首輪がついてる。

「性技で私を墮とそうなんて考えてたみたいだから久しぶりに本気出して完膚無きまでに墮としました〜 テヘッ」

ヤンデレすら相手にならないのか!!

恐るべし底なしサキユバス!!

てか流行に乗ろうよ。ヤンデレ人気あるでしょうに。

何ヤンデレをエロマンガの墮ちエンドみたいにするなんて恐ろしい女です。

「…私が間違っていました…だから見捨てないでください…ご主人様…」

サキユバスの女王舞華、降臨する。

あんた教職辞めて女王になれよ。稀代の悪女になれるよ…。

「いやー、やりすぎちゃった〜」

担任怖い…。

**恐怖！学校が植物に支配された（前書き）**

前話で草司郎が草次郎になっていました。アハハハ…。

見捨てないで読んで下さい！

メアンリやちまったも書いてるんです！！近々こちらも投入します。

## 恐怖！学校が植物に支配された

さて、あの後求婚王子……いや、オルバさんは正気に戻り、ヤンデレが嘘のように、まさに憑き物が落ちた感じだった。けど、慶喜先生を諦めない辺りまたヤンデレ再発の可能性を秘めてると理恵が言っていた。

んで、今帰りのホームルームです。

「はいはい、重大報告がありません！」

慶喜先生の言葉に反応した生徒数、クラスの4分の1。

草司郎、姉と彼氏が来るそうなので、何故か特別早退。

従慈、新作ケーキのレシピを書き出しているが聞いている。

理恵、北原白秋を読んでいて聞いている。

真白、デレデレとしまりのない顔でラブレターを書いていて気づいてない。古式ゆかしい文通。もちろん相手は恋人の赤羽あかばね 智也君とみやだ。皆さん帰る気だからほとんど聞いている、だが次の慶喜先生の言葉で静まる。

「私、婚約しました！」

手の甲を向けて言う。その薬指にはきらりと光る指輪が……

「……………」

「……………」

「……………」

カチャ

「ふう、かけた〜！ダーリンへの手紙 って、あれ、みんなどしたの？」

「慶喜先生が婚約したんだって……………」

聞いてたのか、理恵。

そして空気読んで真白。

「あれ？みんな反応薄いな？」

ジー…………、ごそごそ…………、ペラッ

理恵がかばん開けて読み終わった本を戻して文庫本の金瓶梅を取り出し読む。

「みんな驚いてるだけですよ……………」

「そう言う黒川はなんで本読んでるんだ？」

「一応聞いてますけど、たいして興味ありませんし……………」

なにげに酷いな、理恵……………。

そついや従慈はさつきから反応無いけど…。

あんぐり口開けて驚いていますね。

それが普通の反応だ。

「と言っわけで、籍はこれから入れに行きます」

「教師辞めるんですか？」

「いやいや、説得してこっちで教師は続けるわ」

「あ、やっぱりですか」

「んじゃ、役所に行くてくるわ！アディオス！あ、帰っていいよ」

クラスメート一同啞然。

ついてけない人が多いですよ、慶喜先生。

さて、帰りますか。あ、今日の日直、私だ。

「きりーっ！！れい！！」

「これで帰りのホームルームを終了します」

ガヤガヤと教室から出て行くクラスメート達、私も帰るか。従慈はアルバイトでもう行っちゃったし、真白は手紙をトップスピードで渡しに行ったけど。

「理恵は帰らないの？」



「私、ちょっと理科室に用があつて…」

「そう、また明日ね」

「うん…」

この後の理恵の行動が明日、校舎がほぼ全壊にするなんて普通は考えないはずだ。

校門前に来たところで見覚えある少年が立っていた。

「あれ、理恵ん家に住んでる……ええと名前何だっけ？」

「ん？誰だ？」

「ああ、あん時は気絶してたから覚えて無いかもしれないけど理恵の友達の夜月よ」

「そうか。俺の名はレオニスだ！」

元気な子だな。

「理恵は一緒じゃねえのか？」

「ごめんね、理恵はまだ校内にいるの。理恵に何の用？」

「迎えに来たんだ。案内してくれ！」

「いいよ。ついておいで」

レオニス君を引き連れて校内を歩いているとレオニス君の顔が整っているため結構人が見てる。

そっぴい容姿についてはまだ話してなかったですね。

銀色の髪で髪型はサラサラな髪で耳元にかかる程度の長さ、少し浅黒い肌、金色の瞳、ぷくぷくほっぺにもみじみみたいな手、8歳位かな？道中、たわいない話をしているうちに理科室についた。

「理恵ー！レオニス君が迎えに来たわよー！」

「理恵！帰るぞ！」

理恵は食虫植物に栄養剤を与えていた。

「何、これ」

「ハエ取り草……」

「何してたかは聞かないでおくわ……」

レオニス君がぐいぐいと理恵の服を引っ張る。

「理恵、早く帰ろうー！」

「はあ、これから経過を見ようと思ってただけだなあ……」

「ビデオカメラに撮るときゃいいでしょっに」

「ん……面倒くさいしいや……」

「そう、じゃあ私先帰るわ」

帰宅後、

「ただいま」

「おかえり、お姉ちゃん」

「彩乃、手伝いしてんの？」

「うん、お母さんのお手伝い」

「そっか、私もやるわ」

「いいよ。昨日やってくれたでしょ？それに今日はそんなにお客さん多くないし」

「じゃあ、買い物に行ってくるわ」

「わかった。行ってらっしゃい」

そんな会話をした程度。

所変わって彰、聡の帰宅ペア。

「今日の練習きつかった」

「こつちもだ。風紀のアホがいらんことしてくれてその始末に追われてた」

「あー、風紀とか言ってるけど実質俺とお前のファンクラブみたいなもんだよな…」

「あと彩乃もだ…」  
「キヤーキヤー言いながら群がって来るからうつつとうしいことこの上ない。」

彩乃の方は男子生徒が何人か暴走して襲いかかるうとしたが、彩乃と俺達は姉ちゃんに武術を教えて貰っているため彩乃にボコボコされていた。

「姉さんを脅そうとした奴もいたがな」

「ああ、逆にこつちが脅してやったけど」

「まあ、仮に脅したとしても、姉さんに半殺しにされるだけだろうけど」

「姉ちゃん手加減はしてくれるけど容赦しないからな」

手加減はあまりひどくしないこと、容赦しないは許さないこと、つまりは拳骨一回で意識を飛ばす程度だと思っただけだ。  
あるいは人体急所の一つである水月を普通に殴られるだけだろう。思いつきりでもなく軽くでもなく普通にだ。鍛えてなければしばらくはうづくまる。

ガサガサッ…。

「ん?」

「どうした? 聡」

「今林から結構な物音がしたんだけど…」

「動物じゃないか?」

「それにしても揺れが大きすぎるんだ」

ガサガサッ…ガサガサガサガサガサガサ、ビュン!!

「うわっ!! なんだこれ!?!」

「ちっ!! 捕まった!!」

薦みたいのに絡まれる。

ガサガサ…バサッ!!

「これは八工取り草か!?!」

でかい口みたいなのが出てきた。

「動けねえ!」

「グルルル……」

グワパアツ……。

大口を開けたと同時に絡まっている鳶が大口に向かって動き出す。

地面に足がついているが踏ん張ってみるが力が強いいため、少しずつ大口に近づく。

「このままじゃ喰われる! 聡、まだ踏ん張れるか!？」

「なんとかな! でも時間の問題だ!」

グン!!

鳶の引つ張る力が強くなった。

「なっ!」

「やべっ!」

さっきよりも数倍のスピードで大口に近づけられる。

「グワア!」

「嘘だろ!!?」

大口が俺達に向かって動き出した。

俺は無意識にその名前を叫んだ。

「助けてくれ、夜月姉ちゃん!!」  
刹那だった。

ザンツ!!

ザンザン!!ザンツ!!

バラツ……

大口の首が落ちて絡まっていた蔦が切れる。

「うちの弟たちに何してくれてんの……」

ぞっとするような声で切られた蔦に話しかける。

ビクツ! シュルシュル…

切られた蔦は林の中に帰って行く。何かを感じて撤退したのだろう。

「彰、聡、大丈夫!？」

慌てたように地面にへたり込んでいる俺達を抱きしめる。

「あ、ごめんね、あの植物手刀で切っちゃったから汚いよ」

「ツ…ツ…!!」

カタカタと震えながらもしゃべろうとするも恐怖しゃべれない彰を抱きしめながら、「無理にしゃべらなくていいよ彰…」となだめている。

俺は情けなくて静かに姉ちゃんの胸で泣いた。姉ちゃんは背中を撫でてくれた。

今も昔も姉ちゃんは俺達のヒーローだった。

昔、姉ちゃんを守ろうと決めたのに、俺達はまだ姉ちゃんに守られているのが悔しかった。

帰宅後、

「彩乃ごめんね、頼まれた卵割っちゃった。」「  
ばつがわるそうに舌を見せる。」

「何かあったの？お姉ちゃん、栽培してるきゅうりでも収穫したの」

「ああ、やっぱり匂う？手洗ってくるね」

パタパタ…

「うん、お兄ちゃん達と一緒になんだったね。ん？どうしたの、お兄ちゃん達暗い顔してるよ？」



「何でもない…」

「何も無いよ…」

「…そう、さと兄…あき兄…」

「何だ………」

「近親相姦は駄目だよ？私がやるんだから…」

「「ブツ！！」」

「ななな、何言ってるんだ！」

「そうだぞ！俺は姉さんと一線超える気だぞ」

「なっ！？ずりいぞ彰！」

「ふふっ、良かった。元気になって」

「はめやがったな〜あや」

「兄さんは悲しいぞ…あや」

「えっ、ちょっと待ってなんで二人共げんこってイタタタ！頭グリグリしないですー！」

ドタバタ！

「何騒いでんの！こら！妹いじめちゃだめでしょ！」

「「愛の鞭だ！！」」

「イタイ〜！お姉ちゃん助けて〜！」

そんな感じで1日が終わり、次の日の朝7時34分校門前にて。

ざわざわと校門前に人が集まっている。

その中に草司郎と真白がいる。

「おはよー、ねえどうしたの、この状況」

「朝練してたんだが急に避難するように言われたんだ」

練習着の袴を着ている草司郎が言う。

「なんか、夜はなんともなかったのに朝になったら理科室が蔦だらけになってるんだってさ〜」

ん？昨日確か理恵が……………。

心当たりがありすぎる。

そんなこと考えてると十中八九諸悪の根源が登校してきた。

「おはよう……、なにこれ……」

「あんた、昨日の八工取り草、あの後どうしたの」

「あー、栄養剤与えっぱなしで帰っちゃったな…」

「なんで確認しないで帰ったのよー!」

「えー…、だって私が作ったけど、たかが栄養剤だよ…?」

「あんたが作った時点でアウトよ!」

「酷い言われよう…」

「いや、当たってる俺は思っぞ」

「私も」

「むっ…」

「ふわ…はあ、おはよーさん。で、この騒ぎはなんだ?」

チラッ

「ああ、理恵の仕業か」

揃った所で教師が叫びながら逃げてきた。

「うわああああっ!みんなにげるおお!」

校舎からワラワラと教職員達が出てくる。

校舎からギシギシ音が鳴り響いたと思っただら次の瞬間、轟音に変わった。

ガアアアン！！！！！！

バリーン！バリーン！

ポロポロツ！

ガラスが割れ、コンクリが崩れたかと思うとでかい蔦が校舎から現れた。

ズズズズッ！！

「ギャアアアアア！」

「『『『えー……』』』」

校舎から現れたのは巨大な八工取り草の形をした怪物。

「……チャハツ」「理恵、あんたはどこに行くの……」。

黒魔術士か？マッドサイエンティストか？

もう私にはわからない……。

けど、これをどうにかしなさい！！

**恐怖！学校が植物に支配された（後書き）**

さて、この後はバトル展開に持って行きます。

## ハエトリ草が動く校舎その1

「キヤー！キヤー！」

逃げ惑い叫びをあげる教師や生徒達。

「キヤー！キヤー！はあ…、はあ…、離しなさい！オルバ！目の前に触手があるのに何故止めるの！？」

「俺というのがありながら植物と浮気するんですか！？」

止める理由はそっちですかオルバさん…。

「私の夢が目の前に広がっているのよ！？しかも植物系触手なんて生きてる間出来ないと思ってたの…。だから見逃してえ！！」

あんたっていう人はそんなこと考えてたんですか…

「駄目です。さあ、避難しましょう！」

「いや〜！私のドリームううう！カムバ〜ツク！！！」

ズリズリと引きずられながら遠ざかっていく慶喜先生とオルバさん。

オルバさん、ウチの先生が迷惑かけます。

「さて、理恵？あんたの責任なんだから後始末くらいちゃんとしなさい」

「えー…」

「嫌そうな顔しない！」

シユル…ヒユン！

理恵目掛けて鳶がしなる。

「はあ、しょうがないなあ…」  
ゴソゴソとカバンの中を探っている。

鳶が理恵に届く寸前に理恵は何かを手に持っていた。  
キュポン

ブスリ！

チュー…、

それは薄いピンク色の液体が入った注射器だった。  
「んー…、失敗作だなあ…」

鳶を見ずに注射し、チラリと鳶を見て呟く。

『ギツ…、ギヤアアアアア！』

巨大ハエトリ草が叫び声をあげたと同時に、

グズリ…、グズウ…、ベチャベチャ！

理恵が注射した鳶がグズグズになって溶けていた。

「理恵…、あんた何注射したの？」

「私が見つけた腐食剤の4倍の凝縮液…」

「うおっ…。また新しい毒薬を…」

「んじゃあ…、私は行くね…」

我等がマッドサイエンティスト、理恵、出陣す。

「あ、俺部室に忘れ物があったっけ」

「なに忘れたの？」

「カバン」

「ああ…。で、どうするの？」

「家に刀あるし、家に取りに行つて校舎ん中入る」

何でそんな物騒なの持って来ようとするのかな？

まあいいか。

「がんばってね～。さて、家に帰ってダーリンの手紙をゆっくり読  
も…」

ヒュウウ



「「「あつ……」」」

風でとばされた真白の手紙が校舎の中に吸い込まれるように入ってしまった。

「ギャー！ダーリンの手紙がああああ！」

ダダダダッ！

追いかけて校舎の中に入ってしまった。

「いつてらっしゃーい」

「頑張れよ」

「従慈はどうする？私は除草してくけど」

「除草って…、また珍しいな。夜月はさっさと帰りそうだと思ってただけだな」

「ああ、あれに弟たちが泣かされたからそれのお礼参りよ」

従慈は凍りついた。

夜月は普段、あまり怒らないが（理恵は別）本気の際は見たことが無い。

昔俺がぼこられた時もいやでいやでしょうがないという感じで相手していた。

あれはあれでムカついたので女相手にマジになった。

結果、プライドすらズタズタにされたが…。  
少し昔を思い出してブルーになったが横から殺気を感じ向いてみる  
と、

夜月が凶悪な笑みを浮かべていた。

具体的に言つと、『どつ料理してやるつか？』という感じだ。

「じゃ、行ってくるわ」

「はあ、しゃーねえな、ついてってやるよ」

「あら、頼もしいね」

夜月・従慈ペア、理恵・真白に続き校舎に突入。

30分後、

「出遅れたな…、みんな行ったか…、それじゃ、真打ち登場といきますか」

草司郎、単独で校舎の東側、部室棟に突入。

理恵

「はあ、後始末…、ちゃんとしとけばよかったな…」

ヒュン！ヒュン！

鳶が襲いかかってくるが

バシヤツ、

グズウ…

腐食剤を撒かれあっけなく溶ける。

「とりあえず、理科室いこ…」

理科室前、

「グルルル…」

ハエトリ草の補食部分が理科室の扉を護るように巻き付いている。

「ざつと50か…、繁殖能力は評価すべきかな…？」

「ガアアアア！」

「あー、気付かれちゃった…とりあえずあれ出さないと…」

カバンをあさり目当てのものを出す。

「あつた、エタノールとスプレー缶と、チャツカ…」

バシャン！！

エタノールの中身を全部撒く。

「ガアアアア！！」

補食部分が襲いかかるが、

プシュー、

慌てる事なくスプレー缶を補食部分に向けて噴射し、

カチツ、ポツ！

チャツカ…ンを点火して、

スツ、

ポオオオオ！！

「ギャアアアア！！」

スプレー缶に近付けて簡易火炎放射器にした。  
しかも補食部分にはエタノールがついているので火達磨になっている。

燃え移って無い補食部分が襲うが簡易火炎放射器に邪魔される。

理恵はまたカバンをあさり最後の仕上げの道具を出す。

「あつた…」

理科室の窓を開けてそれを投げ込む。

そしてわずかに残ったエタノールをそれ周りに撒き、燃えている蔦を確認して逃げていった。

バアアアンツ！！！！

その数十秒後、理科室が大爆発を起こした。

理恵が投げ込んだのは特性火薬とよく燃える液体を混ぜて作った特別製の爆薬だった。

エタノールを撒いたのは引火させるためであり、蔦を見たのは導火线になるかどうかを見ていたのだ。

理科室のハエトリ草はぐちゃぐちゃになり無事なのはひとつとしてなかった。

「はあ、後でみんなに怒られるなあー……」

頭をぼりぼりかきながら呟やいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6115x/>

---

永井さん所の四姉弟

2012年1月10日00時49分発行